

後期日程入試に係る検証及び再発防止検討委員会報告書

平成 30 年 8 月 21 日

東京工業大学

目 次

| | |
|----------------------------------|--------------|
| I. 概要 | ・・・・・・・・・・ 1 |
| II. 平成 30 年度後期日程入試に係る入試ミスの検証について | ・・・・・・・・・・ 1 |
| III. 再発防止策について | ・・・・・・・・・・ 2 |
| IV. 参考資料 | ・・・・・・・・・・ 6 |

I. 概要

本学の平成 30 年度後期日程入試における総合問題において、問題文中に誤記があることが判明し、合否判定を再度行ったところ、新たに 4 名を合格者として決定するという重大な入試ミス（以下「本件」という）が発生した。学長は、4 名の方々及びご家族、関係者の方々に多大なご迷惑をおかけした本件の重大性に鑑み、今後このような事態をまねかないように、本件の検証と再発防止策の策定を行うための「後期日程入試に係る検証及び再発防止検討委員会」（以下「本委員会」という）を設置し、教育担当の理事・副学長を委員長に指名した。

本委員会においては、まず、本件の発生した経緯について検証したが、その結果判明したことは本学の入試問題の作成やチェックの仕組みに不十分な点があったことと、入試を担当する教員に相当な負担がかかっている現状である。これらの検証結果を受けて再発防止策については、すぐに実施していくべき問題作成の過程における対策と問題作成後の検証の仕組みを策定するとともに、中長期的な視点に基づく試験実施体制や環境整備についての対策についても検討を行った。

新たな 4 名の合格者については、全員本学への入学を希望し、既に授業へも順調に出席して本学での大学生活をスタートさせている。入試ミス発覚後の対応については、迅速で適切なものであり、この点においては定められた手順に則った的確な対応であったと認められるが、今後は、本委員会の再発防止策に基づいてガイドラインを策定して、対策を着実に実施していくことが急務であるとともに、再発防止策についても不断の見直しを行っていくことが必要である。

II. 平成 30 年度後期日程入試に係る入試ミスの検証について

1. 出題ミス（誤記）が生じた経緯と原因

平成 30 年度後期日程入試の総合問題中の問題 3 は、平成 28 年 5 月から作問を始めた。当該誤記は、平成 28 年度から引き継いだ問題案に難易度を調整するために、解答する際に参考となる情報として、平成 29 年 6 月頃に追記した際に生じた。追記部分の数値は、正答を得るために必ずしも必要ではないため、問題精査の段階で追記部分を利用した検証が不十分であり、結果的に誤記を見落とす原因となったと考えられる。

2. 問題作成の体制と経緯

上述したように、当該問題は平成 28 年度から作問を開始した。後期入試総合問題作成委員会（以下委員会）では、委員会のメンバー（教員 7 名）が複数回の会議で内容等の検討・議論を行い、改訂を繰り返した。最終的にメンバー全員の合意を得て平成 29

年秋に問題案として作成した。

3. 問題作成後の精査の体制と経緯

問題案の精査は、委員会メンバー及び作問に関わっていない複数の教員により平成29年秋から平成30年2月にかけて実施した。委員会メンバーによる精査で、問題内容と模範解答の確認を繰り返した。また、作問に関わらない専門分野の教員による模擬解答及び他分野教員による体裁・文章の精査を行った。さらに、試験当日、配布された問題・解答用紙を用いて、委員会メンバーが問題文の確認および解答を実施した。

4. 再判定の方法と結果

誤記のあった問題3は小問、問1～問9から構成され、問4に誤記があった。小問のうち、問4の一部（構造式を問う問題）と、問4と関連する問5、問6、問7について、受験した全員に満点を与える取扱いとし、その上で合格者を再判定した。その結果、合格ラインより上位に新たな4名がおり、追加合格とした。

5. 出題ミス（誤記）が生じた背景

WGメンバーおよび精査担当者に事後に実施したアンケートおよびヒアリングより、1) 誤記部分を用いなくても正答が得られたため、結果的に見落とすことになった、2) 難易度をやや高めにする必要性があり、設問が複雑化した、3) セキュリティの保持および個々の教員への負担との兼ね合いで、人員増員が困難であった、4) 総合問題の出題分野が広く難易度も高いので、担当分野以外の問題への対応力が不足していた、などの要因が背景として挙げられた。

III. 再発防止策について

1. 再発防止策の策定方針

- (1) 本後期日程入試ミスの検証結果に基づき、出題ミスの再発防止に向けた対策を中心に策定する
- (2) 後期日程入試のみならず、他の入試においても適用できる対策とする
- (3) 入試の作問や精査の具体的な改善策に加え、組織や環境・設備等の全般的な体制についても、検討する
- (4) 取りまとめた改善策については、可能な限り早期に実施していく

2. 再発防止策

ア. 作問及び問題検証にかかる対応

【凡例】

- ◎：本年度（平成 31 年度）あるいは翌年度入試で実施するもの
- ：翌年度入試以降に実施するもの
- ▲：将来的な構想
- A：次のすべての入試で実施するもの（前・後期入試，AO 入試，私費外国人学生，編入学試験）
- B：一般入試（前・後期）で実施するもの
- C：AO 入試で実施するもの

（1）試験実施日まで

- ①作問の経緯と修正履歴等を記録するとともに，修正したことによる影響等について点検を行う ◎A

作問にかかる経緯や修正記録等については，情報漏洩にかかるセキュリティや作業量の面から各科目・各学院により記録として残さない場合があったが，今後は原則として保存するものとする。また，修正にあたっては，修正した部分のみならず，他の設問への影響等について全体的な検証を行う。

- ②点検については，統一されたチェックシートを用いて記録する ◎A

出題委員，出題精査委員等による問題・解答チェックについては，各科目・各学院により独自の方法で行っていたが，統一した項目を設け共通の観点から行う。なお，各科目・各学院が，必要に応じて試験の特性に応じた独自の項目を加えることにより，より精緻なチェックを行うことができるような形式とする。

- ③出題精査委員（作問にかかわらない者）によるチェック・解答 ◎A

出題精査委員については，出題委員を兼ねない者を必ず置くこととし，試験実施日までに新鮮な視点で問題・解答のチェックを行い，出題委員にフィードバックを行う。

（2）試験実施当日

- ①試験開始と同時に，あるいは直前から，問題初見者による解答を実施 ◎BC

上記（1）③によるチェックとは別に，実際の試験に使用する問題冊子を用いた，問題初見者による解答を実施する。問題冊子は情報漏洩防止の観点から搬入後試験当日まで厳密に保管されており，当日に校正等が正確に反映されていないなどの不測の事態がある可能性があること，また，問題初見者による新鮮な視点でのチェックにより新たな問題点発見の可能性があることから，試験当日のチェックを行うこととする。試験と同時にチェックを行うことで，試験時間中に訂正が行うことができれば，ミスの影響を最小限に食い止めることができるため，有効な手段となる。

（3）試験実施日以降

- ①予備校等による解答速報との照合 ◎B

本学の前期日程試験については、予備校等による解答速報が試験実施後の早い時期に公表されており、これと本学の解答を照合することで、合否決定までにチェックを行うことができると想定される。

②学外者（予備校等）へ問題・解答チェックの委託 ◎B（C）

試験終了直後に、学外者による問題・解答チェックを依頼する。学外者の視点による疑義等を収集しミス発見につなげる。合否決定までにチェックを行うことができると想定される。

③問題の公表 ◎B C

試験終了後、速やかに問題を公表する。学外者からの指摘による疑義等を収集できる可能性がある。

④解答例又は出題の意図の公表 ◎B C

試験終了後、解答例又は出題の意図を公表する。学外者の視点による疑義等を収集できる可能性がある。

イ. 試験実施体制等の見直し

(1) 作問について

作問にあたっては、良質な問題を出題することを基本としつつ、担当者にかかる過度の負担や複雑な問題構成が出題ミスやチェック漏れにつながる恐れがあることから、下記の点などに留意する

- ・試験問題の数・量については、前年の実績にとらわれず、毎回見直し検討する。
- ・試験問題の内容についても同様に見直し（例えば、関連する問題を少なくしたり、参考数値や冗長な表現を省いたりするなどシンプルな構成）を検討する。
- ・上記の見直しの結果、修正・チェック回数についても減ずることができるか検討する。

(2) 採点について

採点にあたっては、限られた時間の中で行う作業であることや、採点の人員が限られていることを考慮し、過度の負担を軽減して、ミスの防止やチェックの充実につなげる。

- ・平成33年度入試から、前期日程入試について現行のセンター試験点数による出願資格（基準点）制を見直し、倍率によるいわゆる足切り制を導入して、採点作業量が適正に保てる受験者数とする。
- ・前期日程入試の採点にあたっては、全学的な応援体制を引き続き実施して、一部の教員に過度な負担がかかりミスの誘因とならないように努める。

(3) 作問・採点のための環境整備

- ・上記ア.イ.について、具体的な実施内容を早急にガイドラインとして取りまとめ、学士課程入試において全学共通で実施する。

- ・将来的な構想として、以下の点についても、今後実現可能性を検討する。
 - －作問等に専念できる環境が出題ミスや情報漏洩の防止に資することから、セキュリティ面を考慮した作問・採点専用の会議室や問題保管室、専用の ICT 機器等の設置を検討する。
 - －現在、本学教員が職務の一部として行っている入試研究や作問などについて、この分野を専門に担当する常勤・非常勤教員を配置し、ミス防止につなげることを検討する
 - －作問や精査担当教員については、業務の質・量とも負担が大きいことから、インセンティブのあり方を検討する

ウ. その他

下記の事項については、今回の事案については問題がなく、また、出題ミスの防止とは直接関係しないが、関連する事項として留意する。

(1) 出題ミス等が発生した場合の対応

今回の事案については、概ね適切に対応できていたが、再度出題ミスが生じた場合に備えて、対応マニュアルを再確認し徹底する。

(2) 採点に関しての留意点

採点にあたっては、採点ミスの防止に加え、想定する回答と異なる回答の頻出が認められた場合など出題ミスの発見につながる可能性もあることに留意する。

- ・個々の設問への配点の合計が総合点を超えないよう確認する。
- ・同一問題を複数名によって採点する。
- ・個々の問題の得点や合計点に対しても、複数回の確認を行う。
- ・採点後の答案、採点一覧表等の管理は全て機密扱いとし、保管・管理について十分留意する。

(参考資料1)

後期日程入試に係る検証及び再発防止検討委員会設置について

2018.5.14

(趣旨)

東京工業大学に、「後期日程入試に係る検証及び再発防止検討委員会」(検証・再発防止委員会)を設置する。

(任務)

平成30年度後期日程入試で起こった入試ミスについて、その原因と問題作成・点検作業の過程、実施等の体制を検証するとともに、再発防止のための対策について検討し、今後の実施案を取りまとめる。

(組織)

理事・副学長(教育担当)

教育・国際連携本部(入試実施部門長)

教育・国際連携本部(入試実施副部門長(学士課程担当))

学長が指名する者

(委員会の事務)

学務部入試課

(スケジュール)

5月 入試ミスの検証

6月 再発防止策の検討

7月 報告書の取りまとめ

(参考資料2)

後期日程入試に係る検証及び再発防止検討委員会 名簿

| 区分 | 所属名等 | 職名 | 氏名 |
|------|--------------|----|-------|
| 委員長 | 理事・副学長(教育担当) | 教授 | 水本 哲弥 |
| 副委員長 | 入試実施部門長 | 教授 | 武田 行生 |
| | 入試実施部門副部門長 | 教授 | 権藤 克彦 |
| 学長指名 | 理学院 | 教授 | 二宮 祥一 |
| 学長指名 | 理学院 | 教授 | 大熊 哲 |
| 学長指名 | 理学院 | 教授 | 江口 正 |
| 学長指名 | 理学院 | 教授 | 岩澤 伸治 |
| 学長指名 | 物質理工学院 | 教授 | 中村 吉男 |
| 学長指名 | 生命理工学院 | 教授 | 三原 久和 |
| 学長指名 | 環境・社会理工学院 | 教授 | 高橋 章浩 |
| 学長指名 | 科学技術創成研究院 | 教授 | 西森 秀稔 |
| 学長指名 | リベラルアーツ研究教育院 | 教授 | 田村 斉敏 |
| 学長指名 | 学務部 | 部長 | 田中 昇 |
| 学長指名 | 学務部入試課 | 課長 | 安達 元英 |

委員会開催日

第1回 平成30年5月29日

第2回 平成30年6月15日

第3回 平成30年7月5日

第4回 平成30年7月20日(書面審議)

第5回 平成30年7月30日